

令和 3 年 5 月 17 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02232

研究課題名(和文)「共通感覚」の美学(史)的再定義

研究課題名(英文)The Idea of "Common Sense" Revisited

研究代表者

小田部 胤久(Otobe, Tanehisa)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：80211142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：「共通感覚(koine aisthesis, sensus communis)」という古典古代から伝わる概念に二つの系譜があること、すなわち「共通の」という形容詞の意味の相違に応じて、五感に共通の感覚というアリストテレス以来の系譜と、他者と共通の見解(いわゆる常識)というキケロ以来のローマ的系譜とがあること、これは広く認められた通説である。この通説に対して本研究は、(a)これら二つの系譜が歴史的に交叉していることを明らかにするとともに、(b)この交叉のうちに再構成される問題圏が、20世紀末から感性論的転回を遂げつつある「美学」の現代的課題にとって中枢的な主題をなすことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

すでに日本において共通感覚論は、哲学者の中村雄二郎、精神病理学者の木村敏らによって、独自の展開を遂げたが、本研究は美学的な視点から共通感覚に新たな視点を提起した。その成果の一部は、『美学』(東京大学出版会、2020年)という一般書(とりわけ第六章)のうちに示し、研究の社会的還元を行うとともに、学術的にはThe Journal of Aesthetics and Phenomenologyの特集号The Unconsciousの編集をとおり国際発信した。

研究成果の概要(英文)：We have been experiencing an "aesthetic turn" of aesthetics which focuses neither on our artistic experience or creation, nor on the idea of beauty, but on the aisthesis's role in our aesthetic appreciation, or rather on our aesthetic consciousness of our being. The purpose of this research is to revise the idea of "common sense" of Aristotle and Kant, aiming at reorganizing and reanimating their insights and thereby contributing to an "aesthetic turn" of aesthetics.

Based on commonly held beliefs, there are two strands in the idea of "common sense": the Aristotelian idea of something intra-subjective and the Ciceronian idea of something inter-subjective. Kant's concept of common sense is regarded as belonging to the second strand. In contrast to such beliefs, I argue as follows: first, that in Aristotle there is already a productive germ of the second vein and, second, that Kant's aesthetics succeeds prominently Aristotelean concept of common sense.

研究分野：美学芸術学

キーワード：共通感覚 美学 感性論 感性論的転回

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、科学研究費基盤研究(C)「感性の理論史—美学(史)の再構築のために」(2012-15年、課題番号24520101)の研究から新たに生まれた課題を遂行するものである。「感性の理論史」と題された研究において、私は主として(1)西洋美学を「感性」論として捉え返すに当たっての重要な諸主題の歴史的解明、(2)感性の理論における文化的・歴史的制約についての解明、(3)感性工学とのかかわりから従来の美学理論を捉え返し、美学と感性工学との対話可能性を示すこと、という三つの軸を設定し、(とりわけ(1)と(2)については)予定していた以上の研究成果を得ることができた。(1)の研究を遂行するに際して私は当初「共通感覚」の問題を慎重に避けていた。その理由は、「共通感覚」(この語はアリストテレスの『魂について』において初めて用いられている)という主題がアリストテレスにおいても、またその後の思想史においても、あまりに複雑な様相を呈しており、それに立ち入ることは「感性の理論史」の検討に無用の混乱をもたらすのではないかとおそれたからである。ところが、アリストテレスの「共通感覚」論を検討するうちに、それは通常理解されているように諸感覚に「共通なもの」の感覚(たとえば運動を視覚と触覚で感覚すること)を意味するのみならず、諸感覚を跨ぐ感覚(たとえば甘いものを白いと感覚すること)さらには感覚の感覚(自分が感覚していることの知覚=自覚、すなわち高階の感覚としての感性的次元における自己反省性)でもあることに気づき、そこに近代的な(すなわち精神ないし知性に帰される)「自己意識」とは異なる感性的意識のあり方を探る手がかりがあるのではないかと考えるに至った。

## 2. 研究の目的

「共通感覚(koine aisthesis, sensus communis)」という古典古代から伝わる概念に二つの系譜があること、すなわち「共通の」という形容詞の意味の相違に応じて、五感に共通の感覚というアリストテレス以来の系譜と、他者と共通の見解(いわゆる常識)というキケロ以来のローマ的系譜とがあること、これは広く認められた通説である。この通説に対して本研究は、(a)これら二つの系譜が歴史的に交叉していることを明らかにするとともに、(b)この交叉のうちに再構成される問題圏が、20世紀末から感性論的転回(aesthetic turn)を遂げつつある「美学」の現代的課題にとって中枢的な主題をなすことを示す。このことをとおして、(c)美学史研究が同時に今日の美学の根本問題を構成しうることを実証し、人文的歴史研究の今日的意義を改めて問い直す。

4年間に及ぶ本研究は、大きく4つの軸ないし部門からなる。(1)アリストテレス カント アーレントの軸の再構成。アリストテレスに関しては、『魂について』における「感覚の感覚」という議論が、いかにして『ニコマコス倫理学』では「活動の感覚」「存在(すること)の感覚」ないし「生(きること)の感覚」という主題を介して「友人が存在していることをともに感覚すること」という議論に接続しうるのか、が焦点をなす。カント『判断力批判』にあっては(アリストテレスにおける理論展開とは反対に)(自己の内なる)「生の感情」が「認識諸能力の活動の感覚」を介して(他者に普遍的に妥当する)「共通感覚」に接続する、その議論の流れが、アーレントにあっては、彼女がアリストテレス(およびトマス・アクィナス)由来の(五官を束ねるといふ意味における)「共通感覚」を(カントの改釈を介して)「他人と共有される共通の世界」の成立に不可欠なものとして捉える、その議論の流れが、改めて問い直されなくてはならない。「共通感覚」の第一の軸は intra-subjective な次元と inter-subjective な次元がどのように結びつくのかを明らかにするものである。(2)18世紀思想史の再検討(具体的には「研究計画・方法」において触れる)。美学という学問を生んだ18世紀において、「共通感覚」は一方でスコットランド啓蒙主義に見られるように、「共通感覚」の第二の系譜を引き継ぐ仕方で「常識」という意味合いを前面に押し出す(ちなみに、カント『判断力批判』における「共通感覚」は、カントがスコットランド啓蒙主義を批判しているにもかかわらず、基本的にはスコットランド啓蒙主義と同様に inter-subjective な次元を主題化する)が、他方で(決して目立った仕方においてではないが)とりわけ大陸においては諸感覚の協働(あるいはそうした協働を可能にする陶冶)を強調する仕方で理論化される。第二の軸は、この後者の流れ(特にルソーとヘルダー)に即して「共通感覚」の射程を検討するものである。(3)ヘルダーの「人間とは考える共通感覚器官である」という言葉が20世紀にカッシーラーを介してメルロ＝ポンティへといたる経緯を明らかにしつつ、さらに20世紀後期の「新現象学」運動における「共通感覚」論の新たな展開を跡づけ、あるいは(ヘルダーの議論の背景をなす)モリニュー問題に関する最新の研究成果から18世紀の議論を再度読み解くこと。(4)近代日本における「共通感覚」論の展開の解明近代日本における西洋美学の移入は、20世紀に入ったころから、日本に独自の伝統的芸術観の自覚化・理論化をもたらした(そして、その点についての研究は枚挙にいとまがない)。だが、そこには同時に日本的な感性・身体(論)への自覚も認められる。「共通感覚」という主題はとりわけ戦後になってから、メルロ＝ポンティあるいはアーレントらの影響下に、にわかに脚光を

浴びるが、そこにも伝統的な日本的感性・身体（論）が背景として機能した。本研究では、とりわけ第3年次以後において、間文化的(intercultural)な視点を導入しつつ、近代日本の美学的営為を東西の美学の動的な相互作用に即して描き出すとともに、こうした先達の試みを今日へと接続させる。

### 3. 研究の方法

本研究は「研究目的」に記したように、(1) アリストテレス カント アーレントの軸の再構成、(2) 18世紀思想史（とりわけルソー、ヘルダーの共通感覚論）の再検討、(3) ヘルダーの共通感覚論を機縁とする20世紀の思想運動の再検討、最後に(4) 近代日本における「共通感覚」論の再読、という4つの軸からなる。いずれも思想史的研究であるが、いずれも国際共同研究という形をとる。具体的に述べるならば、国際哲学会議（北京大学）でのパネルへの参加、国際美学会議での報告、フンボルト・コレク（東京大学・駒場キャンパス、ならびに釜山・東亜大学）での招待講演、国際シュレーゲル協会大会での招待講演、国際シェリング協会での招待講演などをとおして、研究を国際発信するよう心がける。

### 4. 研究成果

研究成果はさまざまな形で公開したが、とりわけ『美学』（2020年9月、東京大学出版会）の第VI章「構想力と共通感覚」は、本研究の中核をなす(1)について、最も明確に、かつ一般読者にも向けて記したものである。そこでは、アリストテレス カント アーレントに加えて、ドゥルーズの共通感覚論にも触れ、当初の目的をさらに拡充する仕方でも果たすことができた。『美学』第VIが従来の共通感覚論に対して付け加えた論点は三つある。第一に、カントの『判断力批判』が、「私は考える(Ich denke)」という形式を取る統覚の主導する客観的認識（これについては『純粹理性批判』が明らかにする）においてはけっして顕在化することのない人間存在の基底的な次元を、「私は私を感じる」という私の生命感情をとおして主題化したこと、そしてそれが彼の「共通感覚」論の根幹に位置すること、第二に、アーレントとドゥルーズはともに、「共通感覚」の二つの系譜が相互に関係することを明確に意識し、その点からカントの『判断力批判』を解釈したこと、第三に、アーレントが「共通感覚」の中心にあるとみなす「實在感情」は、まさにカントが「生命感情」という概念をとおして語り出そうとしたものを継承するものであること、以上の三点である。

(2)に関しては、とりわけヘルダーの理論の再検討をとおして、研究を継続した。その成果はアメリカのプラグマティスト・シュスターマンが提唱する Somaesthetics を研究する専門誌 Journal of Somaesthetics に掲載された。この論文において、ヘルダーの共通感覚論が「生の術」の議論と結びついていることを明らかにした。「生の術」というと、20世紀後半にミシェル・フーコーがこの概念を新たに彫琢したことが想起されるが、私は「生の術」という概念が18世紀においてすでに中核的な概念となりつつあったことに気づき、さらにシラー、シュレーゲルのうちにこの概念の意義を探る研究に従事した。シラーに関しては、中国での開催された美育に関する国際会議、ならびに国際シェリング協会主催の研究大会での招待講演などをとおして、研究を進め、その成果の一部は上述の『美学』第X章に文章化した。この研究の新たな点は、シラーの「美的教育書簡」の中核に「美的生」ないし「生の術」という概念が位置することを示し、さらに、この「美的生」ないし「生の術」を自然の過剰という点から明らかにしたことにある。

(3)に関しては、とりわけ Journal of Aesthetics and Phenomenology 雑誌の特集号 The Unconscious の編纂をとおして研究を進めることができた。「共通感覚」は、対象へと向かう通常の感覚とは異なり、普通は意識に上ることがないが、この点に留意して、フロイトの心理学説に還元されることのない「無意識」概念を18世紀から20世紀にいたるまでの哲学的処理論のうち再検討することを企てて、7名の研究者（内訳はドイツ人と日本人各2名、ドイツ人2名、フランス人、イギリス人、カナダ人各1名）に声を掛け、特集を組んだ。主題的には18世紀のライプニッツ、19世紀初頭のメヌ・ド・ピラン、20世紀のカッシーラー、ヴァレリー、メルロ＝ポンティなどを扱う本特集号は、この主題に関する最新の成果をまとめるものである。ちなみに、私はその「序文」において、カント的統覚を逃れるものとして、カントの同時代人であるカール・フィリップ・モーリッツのいう「私は考える」から区別される「と私には思える」に関する議論を取り上げたが、この区別は私の知る限り今までの研究において論じられることのないものだったものである。

(4)に関しては、この4年間では中心的に扱うことができなかったが、しかし、機会あるごとに研究を続けた。例えば、(3)でも触れた「序文」、および2018年にワイマールの古典財団で開催された国際会議「東アジア文化圏における古典概念」における報告（「近代日本における「古典」概念の成立」）においても、日本の共通感覚論の意義について触れた。この点について議論を深めることは、今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 小田部胤久	4. 巻 27
2. 論文標題 シェリング『芸術の哲学』における「範例性」と「独創性」 その歴史的文脈の体系的再構成の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 シェリング年報	6. 最初と最後の頁 60-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32297/schellingjahrbuch.27.0_60	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小田部胤久	4. 巻 38
2. 論文標題 (実践的)無関心と(美的)関与 美の無関心性説 再考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2018年にワイマールの古典財団で開催された国際会議「東アジア文化圏における古典概念」における報告（「近代日本における「古典」概念の成立」）においても、美学芸術学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079396	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 38
2. 論文標題 The Significance of the Classics (koten) in Modern Japanese Aesthetics	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JTLA	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079297	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 6
2. 論文標題 An Iroquois in Paris and a Crusoe on a Desert Island: Kant's Aesthetics and the Process of Civilization	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Culture and Dialogue	6. 最初と最後の頁 35-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/24683949-12340040	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 42/43
2. 論文標題 Three Aspects of Being Aesthetic in Kant's CPJ: Becoming Aesthetically Conscious, Aesthetic Magnitude, and Aesthetic Ideas	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JTLA	6. 最初と最後の頁 61-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/00076543	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 42/43
2. 論文標題 Alexander Baumgarten, "Psychologia empirica" (§ § 504-623) aus der "Metaphysica", mit kritischem Apparat	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JTLA	6. 最初と最後の頁 69-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/00076544	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 1
2. 論文標題 Intercultural decontextualization and recontextualization in the globalized era: with a special focus on the idea of the "Aesthetic Life" in modern Japan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceeding of ICA 2016	6. 最初と最後の頁 92-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 Special Issue 6
2. 論文標題 The "Aesthetic Life": a Leitmotif in Modern Japanese Aesthetics	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Contemporary Aesthetics	6. 最初と最後の頁 no page
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 21
2. 論文標題 Die "Einbildungskraft" und der "innere Sinn". Kants Kritik der Urteilskraft aus der Sicht der Aisthetik	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Aesthetics	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小田部胤久	4. 巻 1105
2. 論文標題 「生の技術」としての芸術 晩年のヘルダーの美学的思考の帰趨	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 36-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田部胤久	4. 巻 17
2. 論文標題 『判断力批判』において aesthetisch とは何を意味するのか aesthetisch に意識すること、 aesthetisch な量評価、aesthetisch な理念をめぐって	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 カント研究	6. 最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田部胤久	4. 巻 17
2. 論文標題 「美的生活」論争の射程	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本の哲学	6. 最初と最後の頁 52-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 40/41
2. 論文標題 Schoene Kunst als "Kunst zu leben". Das aesthetische Denken des spaeten Herder	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 JTLA	6. 最初と最後の頁 61-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/00040375	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計19件 (うち招待講演 16件 / うち国際学会 15件)

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 "Minute Perceptions": Aesthetics in the Century of Empirical Psychology
3. 学会等名 Humboldt Kolleg: Neuronale Geisteswissenschaften und empirische Aesthetik (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Das "Exemplarische" und die "Originalitaet" in der fruehromantischen Aesthetik
3. 学会等名 Wie theoriefaehig ist die Fruehromantik heute? Internationale germanistische Tagung (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 (Practical) Disinterestedness and (Aesthetic) Involvement: Kant's Aesthetic Theory Revisited
3. 学会等名 21st International Congress of Aesthetics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Kunst und Leben in Schillers aesthetischer Theorie
3. 学会等名 Das Unendliche endlich dargestellt. Schellings Philosophie der Kunst im Kontext der Aesthetik und Kunst um 1800 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小田部胤久
2. 発表標題 民衆の発見と芸術の誕生
3. 学会等名 ファウストの文化史 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Zur Historiographie der ostasiatischen Kunstgeschichte unter den globalen Bedingungen
3. 学会等名 Humboldt Kolleg: The Reflexion on Culture and Art in the Age of Globalization (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小田部胤久
2. 発表標題 近代日本における「古典」概念の成立 1880年から1920年まで
3. 学会等名 日本ヘルダー学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Das "Exemplarische" und die "Originalitaet" in Schellings "Philosophie der Kunst". Versuch einer Rekonstruktion aus historisch-systematischer Sicht
3. 学会等名 日本シェリング協会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 The Significance of the Classics (koten: 古典) in Modern Japanese Aesthetics
3. 学会等名 24th World Congress for Philosophy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Defining the Aesthetic Life: Revisiting Schiller's Concept of the Aesthetic Education
3. 学会等名 International Conference: The Ideas and Practice of Contemporary Aesthetic Education and Art Education (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Thee Aspects of Being Aesthetic in Kant's CPJ: Becoming Aesthetically Conscious, Aesthetic Estimation of Magnitude, and Aesthetic Idea
3. 学会等名 Seoul National University, Institute of Aesthetics (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小田部胤久
2. 発表標題 カント『判断力批判』における範例性をめぐって 範例的必然性と範例的獨創性
3. 学会等名 新プラトン主義協会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 The "I Think" and "the I Feel" in Kant's critique of the Power of Judgment
3. 学会等名 Workshop: Feelings and Emotion in Philosophy, Utrecht University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Genese einer am westlichen Klassik-Ideal orientierten Kunstgeschichtsschreibung in Japan,
3. 学会等名 Konzepte des Klassischen in Ostasiatischen Kulturen (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小田部胤久
2. 発表標題 パリのイロクォイ人と孤島のロビンソン カント美学と文明化の過程
3. 学会等名 美学会東部会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 The “ Debate on the Aesthetic Life ” in Late Meiji Japan: Intercultural Decontextualization and Recontextualizaion
3. 学会等名 Internaitional Congress for Aesthetics ( 招待講演 ) ( 国際学会 )
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 An Iroquois in Paris and a Crusoe on a Desert Island: Kant ' s Aesthetics and the Process of Civilization
3. 学会等名 Internaitonal Society for the Eighteenth-Century Studies ( 国際学会 )
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 An Iroquois in Paris and a Crusoe on a Desert Island: Kant ' s Aesthetics and the Process of Civilization
3. 学会等名 中華美学会 ( 招待講演 ) ( 国際学会 )
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 An Iroquois in Paris and a Crusoe on a Desert Island: Kant ' s Aesthetics and the Process of Civilization
3. 学会等名 Internaitonal Debate: Culture and dialogue ( 招待講演 ) ( 国際学会 )
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小田部 胤久	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 480
3. 書名 美学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京大学文学部 美学芸術学研究室 <a href="http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#otabe">http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#otabe</a> Tanehisa Otabe <a href="https://u-tokyo.academia.edu/">https://u-tokyo.academia.edu/</a> <a href="http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#otabe">http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#otabe</a> <a href="http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#otabe">http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#otabe</a> <a href="http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#otabe">http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/staff.html#otabe</a>
---

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------